様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ８ 月　 ８ 日現在

機関番号：３２６３８
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2015～2016
課題番号：１５Ｈ０６６３０

研究課題名（和文）森鴎外の歴史叙述の成立過程に関する研究―日独資料による知的ネットワークの可視化

研究課題名（英文）A Study on the formative process of Mori Ogai's historiography

研究代表者
村上　祐紀（murakami, yuki）

拓殖大学・政経学部・准教授

研究者番号：２０７５８２３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：鴎外の留学時代の『独逸日記』や『椋鳥通信』を手がかりに、鴎外が受容した国内外の知的ネットワークの整理を行い、特に鴎外に影響を与えたと思われる文化史家やジャーナリストの存在を明らかにした。本研究は、鴎外の歴史叙述の方法が江戸期以来の伝統的な学問体系とドイツ由来の近代歴史学の双方からの影響によって形成されたものであるという見通しのもと進めているが、特にドイツからの影響については新たな人物の発見などもあったことによって進展しているといえる。今後も調査を続行する予定である。

研究成果の概要（英文）： With the key of "Doitsu Nikki" and "Mukudori Tsuushin" which were written during Mori Ougai's studying abroad in Germany, I arranged domestic and abroad intelligent networks that he accepted, and revealed the existence of the cultural historians and journalists who influenced especially Ougai. I am advancing this research under the perspective that the traditional academic frameworks since Edo Period and also the modern history from Germany molded the Ougai's way of historical description. I can say that the new discovery of persons is proceeding the research, especially of the influence from Germany. I am still to continue the research.

研究分野：日本近代文学

キーワード：日本近代文学　森鴎外　ドイツ　19世紀末

１．研究開始当初の背景

申請者は鴎外の業績を総体的にとらえるための視座として、晩年の歴史叙述の検討を重ねてきた。一般には歴史小説、史伝と分類される大正期以降の諸作品を「歴史叙述」と包括的にとらえ、日本の近代歴史学との連続性を考察した。

その結果、鴎外の歴史叙述には、明らかにドイツ由来の近代歴史学の影響が見られる一方、それだけでは説明できない部分も存在することが分かった。そしてそうした部分が、江戸時代以来の伝統的な好古家たちの方法と類似したものであることを指摘した。一般に近代の学問の確立は伝統的な学問を後退させたが、鴎外はその逆であり、伝統的な学問に近代歴史学の方法を接合させることによって、自らの歴史叙述を生成していったと結論づけた。鴎外研究史上の通説を反転して見ざるをえないこれらの研究を通し、歴史叙述を対象とすることは、単なる文学作品の分析にとどまらず、全作品を検証することにつながるという見通しを持った。

本研究では、特に鴎外の晩年の歴史叙述に着目し、鴎外独自の形式がいかにその他の歴史叙述や歴史理論に基づいて形成されたのか、その淵源を具体的に見定めることを目標として研究を開始した。

２．研究の目的

本研究は鴎外の業績を総体的に捉える視座として、鴎外の歴史叙述を成立させた知的基盤を具体的に明らかにすることを目的とする。特に、従来断片的に捉えられてきた以下の二点に焦点を当て、2 点を連続的に捉え、両者がどのように鴎外の歴史叙述の成立に影響を与えたのかを検証する。

①江戸時代以降の伝統的な学問体系
②ドイツ由来の近代歴史学

①については、1892 年に設立された集古会に着目する。彼らは伝統的な好古家の集まりであったが、その活動は集古会に限定したものではなかった。むしろその活動は、様々な人々やサロンとの横断的なネットワークに基づいていた。鴎外の歴史叙述における情報提供者としても作中にその名が見られる。彼らの携わった雑誌やサロンにおける人間関係を整理し、具体的な学問体系を明らかにする。

②については、ドイツ歴史学、哲学、ジャーナリズムとの影響関係があげられる。本研究では、ハルナック（Adolf von Harnack,1851-1930）やファイヒンガー(Hans Vaihinger,1852-1933)など著名な人物とは異なる、むしろ従来取り上げられてこなかった人物の受容についても、『椋鳥通信』、鴎外所蔵のドイツ語文献を手がかりに、現地資料の調査を行う。

以上の調査を通し、従来の鴎外研究では別個に扱われてきた①②を、19 世紀末の知的ネットワークの中で連続的に捉え直し、ドイツ及び日本の文献を調査・発掘することによって、鴎外への影響関係を検証する。そのうえで、鴎外の叙述方法が生成されたプロセスやその知的基盤を、作品分析を通して明らかにする。ドイツ及び日本の文献の発掘、調査という実証的な作業を通し、鴎外が自らをキーステーションとして形成した知のネットワークの拡がりを可視化することを目指す。

３．研究の方法

本研究では、以下の 2 点について、ドイツ及び日本の文献の調査・発掘を行う。

①集古会を中心とした江戸時代以降の伝統的な学問体系とその明治期における受容
②ドイツの歴史家、ジャーナリストたちの情報のあり方と鴎外における受容

その際、両者を 19 世紀末の知的ネットワークの枠組みの中で連続的に捉えることによって、鴎外への影響関係を並行して検討する。両者の検討を通し、鴎外の歴史叙述や『椋鳥通信』に見られる方法がどのようにして獲得・形成されたのか、考察する。

平成 27 年度は鴎外の受容した国内外の 19 世紀末の知的ネットワークの整理を目的とし、おもに文献の発掘・分析を進める。日本国内においては、集古会を中心とした好古家たちのネットワークの調査と、その知のあり方の特徴について考察する。考察対象は、彼らの関わった雑誌に残された文章である。ここに見られる「人」「事」「物」に関する研究を調査することによって、その学問的な特徴を明らかにする。ドイツにおけるネットワークの調査については、『椋鳥通信』を参照する。ただし、非常に膨大な情報量であるため、特に鴎外が受容したドイツの歴史家、ジャーナリストたちの整理を行い、その文献の入手・分析を行うことに作業を絞る。鴎外の受容は原典によってなされたことから、できる限り同時代の文献を探索する。

平成 28 年度以降では、引き続き文献の調査・分析を行うと共に、鴎外の叙述方法に対する影響関係についての検討を進め、総括を行う。より詳細に調査を進めるため、調査対象として、幸田成友を中心とした大阪での好古家たちによる文人発掘事業を取り上げる。大阪でのこれらの人びとの活動が集古会周辺の人々と重なり合うことを確認し、ネットワークの広がりを捉えることを目指す。また、ドイツのジャーナリストの一人として、ヨハネス・シェル（Johannes Scherr、1817-1886）およびその周辺の調査

を行う。シェルの著作は、東京大学鴎外文庫にも数冊所蔵されており、鴎外自身の書き込みも見られることから、熱心な読書行為がなされたことが推測される。また、文学・歴史・伝記とその著述の範囲も、鷗外と類似している。しかし、現在に至るまでシェルについて調査されたものは管見の限りない。繰り返し影響関係を論じられてきたファイヒンガーなどの受容に加え、シェルを中心としたドイツの歴史家、ジャーナリストたちの知的ネットワークのあり方を調査することは、本研究において重要な課題であると考えられる。

以上の調査を踏まえ、関連作品の分析を通して、鴎外の情報受容における影響関係を具体的に明らかにする。関連作品としては『舞姫』『うたかたの記』『椋鳥通信』『かのやうに』などがあげられるが、あくまでも本研究は鴎外の業績を総体的に捉える視点を提出することを目的とするため、知的ネットワークを形成する試みとして作品を横断的に評価することを目指す。

４．研究成果

27･28 年度における 2 年間の調査の結果、以下のような成果が出た。

①『椋鳥通信』など同時代の新聞を読み込んでいたことからも明らかなように、鴎外の知識の受容の特徴として、まず手引きとしての概説書を手がかりに全体図をつかみ、その上で自身の関心を深めていくという方法をとっていることが明らかになった。そのような方法は、五條秀麿ものの連作として知られる『かのやうに』などにおけるドイツの学問受容からも明らかである。このことは、鴎外のドイツ学問受容の過程を考える上で重要な点であると考える。東京大学総合図書館鴎外文庫にはこうした概説書の類が多く所蔵されており、そのうちのいくつかの資料についてはベルリンでの調査において入手することができた。今後は、鴎外がそうした概説書を用いて、どのように知識を習得し、それを用いていったのか、具体的に明らかにしていく必要がある。

②本研究では、鴎外の歴史叙述を考える上で、特に、ドイツの文化史家やジャーナリストからの影響を考察した。『独逸日記』や『椋鳥通信』をもとに調査を行ったが、当初想定していた研究対象以上に様々な人物の発見があった。とりわけ、ドイツのジャーナリストの一人として、ヨハネス・シェル（Johannes Scherr、1817-1886）およびその周辺の調査を行う中で、似たような経歴を持つグスタフ・フライターク(Gustav Freytag、1816-1895)にたどり着いた。中でも、鴎外がベルリン留学時代に入手したとされる『先祖録』は鴎外の歴史叙述に影響を与えたのではないかと考えられ、今後考察を深める必要があると思われる。この人物にたどり着いたのは、所蔵の有無にかかわらず、同時代に鴎外が見ていたと推測される世紀末ドイツの人文学を幅広く調査した結果であると考える。

③今年度、鴎外におけるドイツ人文学の受容を調べる中で、明治末期の日本におけるドイツプロテスタントの影響にまで調査を広げることができた。研究開始当初、ここまで広げることは予想していなかったが、鴎外の関心のあり方からドイツプロテスタントが日本に与えた影響は重要であると考え、調査を行った結果、鴎外とドイツプロテスタンティズムを結ぶ人物として赤司繁太郎にたどり着いた。鴎外にとどまらず、ドイツプロテスタントが明治日本に与えた影響は見逃せないものであり、赤司は鴎外と共通の関心も持っていたことが明らかになった。③については特に、今後も調査を継続していく予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　　件）

〔学会発表〕（計１件）

村上祐紀「「鎚一下」とその周辺－森鷗外と 19 世紀ドイツ人文学」（森鷗外研究会、2017 年 3 月 29 日、大妻女子大学）

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

村上　祐紀（Murakami, Yuki）

拓殖大学・政経学部・准教授

研究者番号：20758239

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者

(　　)